

## 大迫地区

### 大迫城

内川目古館にある桂林寺の南側の山頂には、数段の広い曲輪（くるわ）、物見台、空堀（からほり）、塹堀（たてほり）、馬場、的場など、戦国時代の典型的な山城の形を残す城跡がある。大迫城あるいは、高屋敷の御館とか呼ばれているが、実際に今から四百年以上前、ここには稗貫郷一帯を支配していた豪族・稗貫氏の一族である大迫氏が居城していて、大迫地方（亀ヶ森を除く大迫・内川目・外川目）に睨みをきかせていた。

戦国時代の末期、大迫城主は大迫右近といった。右近は近隣にその名を知られたなかなかの豪の者で、和賀地方一帯を支配していた豪族・和賀氏とも姻戚関係にあった。右近は城下の整備に努め、外川目旭ノ又（ひのまた）の寺地という所にあった馬鳴山東林寺の住職に頼み、大寺院を建立して宝鏡山桂林寺を開山させた。

城の下には大迫氏の屋敷跡があったと考えられ、高屋敷、城ノ内（じょうのくち）などの屋号もあるほか、町場が造られていたという場所には、上小路（うわこうじ）・下小路（したこうじ）の地名が残っており、このあたりを開田の際には当時のカマドの跡が一定間隔に並んでいるのが見えたともいう。

大迫氏の家臣の名前を、田中神社の神官である山陰家の文書から拾うと、佐藤備中、平綿（ひらわた）土佐、堂前（どうのまえ）彦次郎、中野対馬、田中亭、八木沢仲、金沢能登、平戸出雲、館森将監、平増付（へいぞうづけ）結城、阿部修理、中通（なかよう）弥六郎、黒森周防（すおう）、白岩与助、天王伊賀、大又加賀頭、折壁十左エ門、団子田豊前などを除けば、内川目の地名を名乗る者ばかりであるが、これは山陰文書が内川目中心の記録になっているからである。

大迫城は天然の要塞で、西には岳川の清流を望み、南と北側は谷深い急峻となって人を寄せ付けないのである。また、唯一の弱点である尾根続きの東側は空堀で切断し、北上山地の山々が重なって大軍の侵攻を難しくしている。この城の二の丸にあたる場所には、現在稻荷神社の小祠があるが、これは比較的新しく、明治時代に勧請されたものであるという。この稻荷のかたわらに、最後の城主であった大迫右近が飲用に供したという井戸がある。深さわずかに数尺に過ぎないが、いかなる炎天にも水が涸れたということはない。また、この井戸水は村に変わったことが起きる前兆には、白く濁ると伝えられている。

いつのことであるか、こんな伝説も残っている。

ある時の戦で、この城は敵に包囲されてしまった。そして、飲料水も敵方に押さえられ、ついには断たれてしまったので、城将の右近は一策を案じ、白米を滝のように流して見せ、敵には少しも水に困っていないように見せかけたという。

『大迫郷』ほか)

参考資料・・・秋田城介「陸奥の城」より「大迫城」

<http://zyousai.sakura.ne.jp/mysite1/oohasama/oohasama.html>